第 562 号 平成4年3月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1992 年（平成四年）
3 月 号（No. 562）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

ピレネーの旅(下)……中村純二…(1)
海外の山……(2)
「マカルーからの生還」
山研改築委員会報告『山研と自然エネルギー』……(3)
平成四年度海外登山基金交付団体決まる！……(3)
1992年日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊員および事務局員の募集…(3)
日本三百名山選定の経緯……(3)
追悼　谷口現吉名誉会員
……山田二郎…(4)
訃報　熊谷太三郎氏……(4)
東西南北……(5)
「三田さんを偲ぶ会」「アルバータ後日譚に関する往復書簡について」ほか
図書室だより(7)……(7)
書籍・雑誌受入報告 1992年1月，日本山岳会所蔵山岳地図目録5－(1)…(8)
図書紹介……(9)
「山の詩集」「ひとり歩きの金剛山」「静岡の百山」
自然保護随想……(10)
報　告……(11)
「第29回木暮理太郎翁碑前懇親会の報告と次回のお知らせ」「姉妹山締結報告」ほか
会務報告……(13)
1月定例理事会，ルーム日誌，山研・ナムチャ合同募金応募状況，新入会員(復活)，住所・住居表示変更
お知らせ……(14)

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテープ電話
3234 六六五九

ピレネーの旅（下）

中村純二

ポーティジョンよりアネト（'91.6.8）
Portillón Aneto

さて十四日(金)の夕方、私共は再びレンクルーサの小屋に入った。翌朝は暗い中に起きて五時半出発。雪渓の登りは快調だったが、ポーティジョン尾根を乗越す所でルートを誤り、自記気象計のある小ピークに出てしまった。峠は真下数十㍍の所に見える。アイゼンを外ずし、両手を使って峠に降り立ち、ここから大雪田に落込む急な雪壁も後向きに下った。

このあと氷河のトラバースとなるが、クレバスも今は雪で埋っている上、折からのガスのため、白一色のホワイトアウトである。やがて霙となり、霰に代って風も出て来たので引返す組も出て来た。私共は折角の機会だと云うのでコロナス峠に達し、急斜面をつめて正午前、頂稜の一角に着いた。ここからは左右とも一〇〇㍍程切れ落ちたナイフリッジとなるが、岩は堅く、間もなく標高柱と十字架の立つアネト頂上に達した。一瞬ガスが晴れ、鋸歯状の東南稜やフランス国境の白い山々を見渡せたのは幸せであった。

ところが、雪の急斜面の上まで戻った時、急に空は真黒になり雷鳴が聞こえて来た。そして雪面の凹部を辿りつつ、大急ぎでコロナス峠に下る頃には激しい雹と共に、耳をつんざく雷鳴と稲妻に見舞われ始めた。アンザイレンしていたパーティーもザイルを外して夢中で駈け降りて来る。最後の三人パーティーが来た頃漸く雷鳴は遠のき、一同無事を喜び合った。

◇　◇　◇

比較的山容のなだらかな東部山群の登山基地には、登山電車の終点ヌーリアや、隣国アンドラのデンバリーラ峠などがある。私共は五月二十六日、デンバリーラ峠からピコ・デンバリーラに登り、二十八日から三十日にかけて、ヌーリアから主峰プイグマール二九一三㍍や、ピコ・コマ・デル・クロクあるいはトレニューレスに登った。この時も霰や雷に出会ったが、人の殆んど通らない登路脇に、シエルボ（鹿）の大群や、アイベックス（山山羊）の群など遊んでいたのが印象的だった。

オルデサ国立公園を含むオルデサ山群と、西隣のオッソウ山群は共に、一〇〇〇㍍を越す岩壁に恵まれ岩登りのメッカとなっている。私共も数年前訪れたことがあるが、ルートについてはケフ・レイノルズやロベール・オリビエの本に詳しい。

◇　◇　◇

以上ピレネーの旅の概要であるが、私共の旅の目的は登山だけでなく、未知の世界に入り、そこに住む人々の心

に触れるのが主な目的であったことを一言付加えておきたい。

ピレネーの西部山群には、イバニエタ峠やソムポルト峠があり、これらは十一～十六世紀に、ヨーロッパ諸国から聖地サンチャゴに向う年間何十万人もの巡礼が通過した所である。先年私共はこれらの古い峠道を辿った。前者の近くには十三世紀に作られた壮大なロンセスバージェスの修道院、後者の沿道には十世紀以降大変賑わったが、今はさびれたカステージョ・デ・ハカの静かな村が見られる。このような場所では、当時の華やかなイベリヤ文化の香りが十分味わえた上、修道僧や村人がよき伝統や地方色を守り続けて人間らしい豊かな生活を営み、私共に対しても暖い心で接して呉れるのに大いに感激した。

イベリヤ半島の美しい海岸の村や、ローマ時代の遺跡の残る古い町、岩山の岩々に寄り添うように作られた山村などにおいても、同様な体験をした私共は、すっかりイベリヤ半島に取りつかれ、毎年二箇月位づつ同地を訪れ続け、昨年で六年目になってしまった。

旅を充実させるため、観光地は避け、毎回行先を地図や書物で調べる他、宿は全く予約などせず、自由で余裕のある日程で動くことにしている。その宿も地方色のある民宿的なオスタルを、食事は土地の人が入る小さなレストラ

海外の山

マカルーからの生還

二十二歳のオーストラリアの青年が、四千㍍のヒマラヤ山中で迷い、チョコレート一つで四十三日間、生き延びた、という記事が二月の初めにあった。ヨットレース中に遭難、仲間たちが次々に死んでゆく中、一か月近い時をただ一人生き抜いた日本のヨットマンの話も最近のことだ。

人間の生きる意志、というのはまことに強い。昨年十月、マカルー（八四六八㍍）登頂後、八千㍍で二晩のビバークの後、パートナーを失いながら生還した長尾妙子（三六）の場合は、どうだったか。

夏七月、ブロードピーク（八〇四七㍍）を登って念願の八千㍍峰のピークに立った後、長尾はマカルー隊＝今村裕隆隊長（三二）＝に合流した。九月十四日、登攀開始。天候に恵まれた上、スペイン隊ら先行パーティーのトレールがあったことから登攀は順調に進み、十月五日、今村隊長ら日本人三人とサーダーがまず登頂した。

七日午前三時過ぎ、二次隊の長尾副隊長ら日本人三人と、シェルパ一人が第四キャンプ（七八〇〇㍍）を出発、八千百㍍付近で不調の一人がシェルパに付き添ってもらい、下山した。長尾と残る石坂工（二六）は、ラッセルを交代しながら登り続け、頂上直下五十㍍地点から吹き始めた猛烈な風をついて長尾が午後三時四〇分、石坂が四時に頂上に立った。石坂は睡眠時酸素を使用したが、長尾にとっては、ブロードピークに次ぐ八千㍍峰連続無酸素登頂である。

しかし、一次隊は昼前に登頂しているのに較べ、時間はいかにも遅かった。百五十㍍ほど下りたところで、薄暗くなった。多分八千三百㍍ぐらいのところで、雪壁に横穴式の雪洞を掘った。

「時間があったのでピッケルで随分丁寧に掘って、居心地よくしました。夜、時々声をかけると、石坂さんもちゃんと応答していたので心配は全くしなかった」

朝、石坂の様子は前日と違っていた。自分では、ほとうど下りれない状態で、長尾がザイルで確保しながら、スタカットでゆっくりゆっくり下った。正午になっても、やっと八千百㍍ぐらい、フィックス・ザイルのある八千㍍地点まで達したところで暗くなりかけていた。

長尾は、夕方になると目が霞んで見えなくなる。石坂がフィックスを頼りに先に下ったが、下はセラック帯で雪洞は掘れない、と長尾は気づいた。ライトも電池切れとなった。石坂に登り返すよう、呼ぶと返事があった。三度ほど声をかけたが、四度目には応答がなくなった。ザイルはピン、と張り詰めたままとなった。

一人きりの八千㍍二晩目のビバークを、長尾は小さな雪洞で淡々と耐えた。帽子が雪の壁にこすれる音が人の話し声に聞こえた。幻聴である。翌朝、フィックス・ザイルを右腕にからめ、祈るような気持ちでそっと下った。ザイルの先に衣服が見え、石坂の死を確認した。

帰国して四か月の入院中、長尾は足指二本を残して両手両足の指と鼻の一部を失った。「大丈夫、慣れればまた登れますよ」と、持ち前の明るさはなくしていない。

常人なら、錯乱していたかもしれない八千㍍の二晩のビバーク。長尾にとっては、悲壮感もなく、ドラマチックでもない生還だった。

（江本嘉伸）

ンやバルを利用する。移動もできるだけ、普通列車や路線バスに乗って人々との交流を深める。何の義務も負わないこのような自由な旅の一環として、ピレネーやカンタブリア山地にも踏込むことになったという次第である。

山研改築委員会報告

『山研と自然エネルギー』

上高地山岳研究所は昭和四十八年（一九七八年）十月に新築され、以来十八年間「さんけん」の愛称で会員やその関係者に親しまれて来ましたが、湿気などによる老朽化で数年前から改築の話が出ておりました。

平成二年度の通常総会において改築案を提案して承認され、ここに「上高地山岳研究所改築委員会」が組織されて設計、資金などの本格的活動を開始したのでした。

新しい山研の設計図や完成図は今後の会報紙上で発表する予定ですが、今回は改築にあたり計画しております幾つかの案のなかから「自然エネルギー利用計画（案）」についてお話します。

自然環境保全が世界的規模で叫ばれておりますが、エネルギーの利用も当然大きな問題として浮かび上がって来るのです。そこでクリーンなエネルギーとして最近注目を集めているのが各山岳地の山小屋などで検討されている風力、太陽光、水力の自然エネルギーを利用した発電なのです。

山研改築を機会に日本山岳会としてもこの自然エネルギーを利用した発電の可能性を検討し始めたのでした。

立地条件から風力と太陽光は期待出来ませんので山研の裏手に流れる善六沢の水流を利用しようとのことで、昨年（平成三年）六月に科学研究委員会の鳥居亮委員（神奈川工大名誉教授）と自然力発電プロジェクトの千矢博道氏、それに山研改築委員らが現地で調査を行った結果、その水量は発電に充分見合うほどのものであるとの報告でありました。

同年十月末の山研閉所の折には水力タービン製作メーカーである大分県の林エンジニアリング㈱林義彰社長をまじえて再び現地を調査し、その発電の可能性に益々自信を深め、自然エネルギー利用に向けて科学研究委員会の協力のもとに本格的に計画を進めております。

善六沢に小水力発電装置を設置して一～五ｋｗの電力の案で検討し、その用途は改築後の山研に作られる「山岳資料館（仮称）」の照明とし、余剰の電力は湯を沸かすことに使用することも可能なのです。

日本各地にある山小屋の中には小水力利用の発電可能な適地もかなりあるので、この装置をクリーンエネルギー利用の実験、およびそのお手本としてみたくも考えております。

環境庁、地元営林署には機会ある毎に発電装置設置の主旨を説明しておりその実現に向けて近く計画書を提出する予定でおります。

改築後の山研は益々面白くなります。

（文責　坂本正智）

平成四年度海外登山基金交付団体決まる！

今回の海外登山基金につきましては年末までに応募のありました六団体について、一月十三日審査が行なわれ十六日の理事会において承認をされましたので、ここにご報告を申し上げます。なお、助成総額は三五〇万円です。

一五〇万円　一九九二年日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊

一〇〇万円　アンタークティックウォーク南極点探検隊

五〇万円　第三次マッキンリー気象観測機設置登山隊一九九二（ナイクニセン）

五〇万円　広島山の会　四姑娘（スークーニャン）山南壁登山隊

交付団体につきましては報告書および、決算報告が義務づけられております。今後もヒマラヤ登山を中心とした計画および科学研究も含めて幅広い支援を行ないたいと思っておりますのでどしどしご応募下さい。

海外登山委員会事務局

一九九二年日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊員および事務局員の募集

本年度はナムチャバルワ峰挑戦の最後のチャンスであります。会員諸兄の中から、高所、登山の経験を有し、意欲を持って参加できる隊員を募集します。また登山隊支援の窓口となります事務局の開設にともない専従事務局員を引き受けていただける方を探しております。詳しくは高所登山研究委員会まで。

高所登山研究委員会

日本三百名山
選定の経緯

三百名山の新リスト作成の機会に、その選定の経緯についてとりまとめたので、その概要を報告しておく。

選定の規準、経緯の概要は『山』第三八二号（昭和五十二年四月）所載の皆川完一氏の「『山日記』の日本三百名山（案）について」に詳しい。その概要は次のとおりである。

規準は、昭和三十九年七月に刊行された深田久弥氏の『日本百名山』のそれとほぼ同じ線上にあるといってよい。したがって深田百名山のすべてを包含し、それに二百山を加えた結果になっている。『日本百名山』は発刊以来多くの読者を得、読売文学賞を授与された（同四十年二月）ことや、深田氏の茅ヶ岳での急逝（同四十六年二月）等の事実と相まって、深田百名山を歴訪する登山者の漸増を招来した。

これらの情勢を背景として、昭和五十一年頃、山日記編集委員会によって、日本三百名山が企画され、同五十二年一月発行の『山日記』一九七七年版・四十二輯に「日本三百名山（案）」として掲載された。その末尾には「この日本三百名山（案）に多くの方々が御意見をおよせ下さるようお願いする」と付記されている。一方、本会員中の百名に対して三百名山の原案が配布され、アンケートの形式で解答が求められた。その結果原案のうち四十五座の山を入れ換え、三百名山（案）ができあがったと説明されている。そして『山』には、（案）から削除すべき山、追加すべき山等が明示された付表が加えられている。

以上の結果を踏まえた作業が行われ、次輯即ち、『山日記』一九七八年・四十三輯（昭和五十三年）に（案）の文字を除いた形で発表された。それが日本三百名山発表の時と解される。

その内容は昭和五十四年版にも同形式で踏襲されたが、五十五年と五十六年版には収載を欠き、五十七年版には「日本の山と三百名山」という標題で、形式は三百山の表示ではなく、日本の山の表の中の、三百名山に該当する山に※印をつけたものに変って再び登場するようになる。この時から「※印は日本山岳会選定の『日本三百名山』」という注記がついた。以降一九八八年版までその形式がずっと続けられてきた。

（三百名山に関する委員会）

訃報

熊谷太三郎氏（五五一九番）

参議院議員、元科学技術庁長官、熊谷組相談役。一月十五日、急性肺炎のため死去。享年八十五歳。告別式は同十八日、福井市の本願寺福井別院で行われた。喪主は長男、太一郎氏。

知る人ぞ知るＡＡＣＫ（京都大学学士山岳会）の会員であり、また深田久弥氏の古い山友達でもあった。新設の本会福井支部の顧問格。

追悼　谷口現吉名誉会員

山田二郎

去る一月二十一日午前十時五十三分、名誉会員の谷口現吉さんが急逝された。享年八十一歳であった。

一週間程前から軽い風邪をひかれ、大町のご自宅で静養しておられたところ、前日の夜半、病状が急変、救急車でご入院、必死の手当ての甲斐もなく、半日後には帰らぬ客となられたと聞く。

日頃のご壮健そのもののお姿、とくにここ数年は、顧問をしておられた大町市山岳博物館のこと、五年程前から情熱を傾け今年は全国規模の公認競技にまで育て上げられたシルバー・スキー大会のことはもちろん、当会のナムチャバルワ遠征、山研、自然保護など実に多方面に亘っての、私達も驚歎するほどの意慾充実ぶりを思うと、今もってその死が信じられない。

谷口さんは、三田さんのインドからの便りに感動して、やがて来るべきヒマラヤ登山を目指し、わが国積雪期高所露営の先駆者として幾多の困難を乗り越え、また後進の指導に情熱を注がれた。

戦後もいち早く、堀田、浜野、関根、林、望月、神山氏など同時代の大学ＯＢを結集し、私達のような当時の大学山岳部若手の指導育成に当られた。昭和二十八年に始まるマナスル遠征以降数多くのヒマラヤ遠征では、谷口さん達のご指導を受けた大学山岳部若手ＯＢが活躍し心から喜んで頂いた。ことに第一次マナスルでは子飼いとも云うべき加藤喜一郎と私とが七三五〇㍍の雪洞で快適な一夜を過したことを聞かれて「俺が始めた日本での積雪期露営も遂にこのレベルに迄来たか」と喜んで頂いたことは忘れられない。

現在日本山岳会会長の重責を仰せつかっていて思うことは、当時の受講生であった村木、大塚、藤平、松田の諸氏を始めとする数多くの旧友達が支援して下さっていることの心強さであ

り、その指導者であった谷口さんの偉大さをひしひしとかみしめずにはいられない。

謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。

三田さんを偲ぶ会

本会名誉会員、元会長三田幸夫氏の一周忌を前に、去る二月二日、国際文化会館において、本会ならびに慶応登高会員等三田さんと親しかった関係者有志、約百十名により、標記の集りが開催された。

席上、多くの方々から、三田さんを偲ぶスピーチが行われたが、島田巽名誉会員からは、別項の様にアルバータ登山の第二登をされたアメリカ隊のオバーリン、アイレス氏と交された文通書簡、三十三通（生前三田幸夫氏から託されたもの）が、本会資料委員会で保管して欲しいとして山田会長に手渡され、また、三田さんの女婿、芳賀孝郎氏からは、札幌での入院生活中の思い出話、一九六六年に、渡米された折にポートランドでアイレス氏からお世話になった話また芳賀氏の奥様の淳子さん（三田幸夫氏長女）が一九七五年に北海道が派遣した海外婦人派遣団の一員として渡米された折、カナダのバンフ市の図書館で、たまたま開催されていたアルバータ登頂五十周年記念の展覧会を見る機会に恵まれたという珍しいお話もうかがうことができた。

なおこの会では、三田さんの愛唱された“Der Lustig Wonderer”や〝駿河路〟の三田さんの声が大歳豊彦氏の編集になるテープで披露され、めったに聞かれたことのない「おーい、静かにしろ」という三田さんの大声が聞かれ、参会者が、静かになる一幕もあった。

なお閉会にあたっては、登高会会報三十七号「三田幸夫氏追悼号」が配られ、一同、帰宅してからも、三田さんを偲ぶ会の余韻をかみしめた。（Y・M）

アルバータ後日譚に関する往復書簡について

島田　巽

三田さんを偲ぶ、今日のこの集りに当り、この資料を日本山岳会宛にお渡ししたいと存じます。

この資料は、私がお手伝いした三田さんの『わが登高行』下巻が出来あがった一九八〇年の終り頃、三田さんから、私に託されたものであります。

その内容は、一九四八年の夏にカナダのアルバータ峰に米国山岳会のJohn C. OberlinとFred Ayresの両氏が登頂し、槙さん、三田さんたちの初登頂に次ぐ第二登を二十三年ぶりに果したことに端を発しています。周知の通り、この米国隊が、日本隊が頂上に置いてきたアイス・アックスに記されたM・T・Hの文字から、天皇陛下のものではないかと考えたことから、日本側への文通がはじまったわけです。その文通の相手を引き受けられた形の三田さんは、実に親切に応待され、英文の返書を認められ、それらの書簡一式が、ここに米国側からの書簡とともに保存されているのです。

初登頂と第二登との間に二十三年もの隔たりがありながら、その両者の出会いが、このように克明に保存されているのは、登山史上非常に珍しいことではないかと思われます。三田さんが残された貴重な業績と申しても過言ではないので、その見地から、この三田さんから託された文書を保存するのに、最も適切と思われる、日本山岳会資料委員会へバトンタッチ致す次第であります。三田家におかれましても私のこの考えにご同調いただきました。

さらに出来れば、老齢の私には出来ないでいたことですが、この資料を土台にして、登山史上珍しい日米双方のコミュニケーションの模様を記録に残して戴ければありがたいと存じます。

〔**編者注**〕この文書は、三田さんを偲ぶ会の席上、島田巽氏より山田会長に託された資料の〝そえ書〟として記されたものを再録させて戴きましたが、この〝そえ書〟には、アルバータ第二登頂者と三田さんとの文通、その他の記録三十三通の明細リストが付いておりましたが、紙面の関係で省略させて戴きました。

第一回ASKC展を見る

小倉　厚

絵を書く岳人は多い。わが日本山岳会でもその例外ではない。昨年二月、アルパイン・スケッチ・クラブ（ASKC）は生れるべくして誕生した。初心者あり、ベテランありの四十数名。そして同好会として活動を重ねること一年。その成果の発表の場として、このほど第一回ASCK展が開催された。

会場はJR渋谷駅にほど近い道玄坂にある東京電力電器温水器センター・ギャラリー、期日は一月二十四日～二

十八日の五日間。

ギャラリー内に入ると、スペースの関係で一人二点以内に限ったといわれるが、会員三十八名の五十八点の力作が展示され満杯の盛況で、主催者は今後のギャラリーの確保が心配と嬉しい悲鳴を上げていた。その内訳は油絵十六点、版画三点、パステル画五点、ガラス絵一点、スケッチ（水彩画）三十四点となかなか多彩だ。展示のレイアウトもスマート。豊田泰会員考案という三脚の台は狭いスペースを有効に活用しているし、さりげなく置かれた渡辺立男会員の五点のうちわもよい。

絵の巧拙は私は知らない。さすがにアルパインがつくスケッチクラブだけあって、白馬岳、剱岳、上高地、燕岳、槍ケ岳、焼岳…それに海外トレッキングのときの作品といったほとんどが「山の絵」。なかには今はなき旧山研、ブロッケンの絵、こんな人がこんな才能があったのかの新発見もあり、さすがに山男、山女の絵だと思う。とくに美しい緑のカラーが目を引き、いずれも山行の合間に筆を走らせる姿を彷彿させる力作・傑作ばかり。

参会者もひっきりなしで、当初の胸算用では五日間で三百名、がそれを大幅に上廻る約四百名程の大盛況。みな喰い入るように熱心に見入る姿が印象的だ。

いずれにしても、同好者には「この次にはもっとよい絵を」、絵をやらぬ人にも「私も書いて見よう」との意欲を燃え上がらせるに充分な展覧会であったと思う。

中国青海省登山協会による崑崙登山月間の計画概要

中国青海省登山協会（吳延叉秘書長）の訪日代表団一行三名（高成学団長）が十二月上旬来日。十二月七日午後本会を表敬訪問した。

本会では山田会長等が歓迎会を開き、種々と情報交換を行ったが、席上、「第一回崑崙登山月間」の計画について説明があり、本会会員各位の参加を歓迎する旨の説明があったのでお知らせします。

各支部、会員各位で、関心をお持ちの方は、本会事務局または左記青海省登山協会宛直接FAXにてお問合せ下さい。（日本語で可）FAX：001－873－971－44145

実施方法

◇**主旨**　崑崙山は「中華民族の象徴」「国山の母」と言われており、魅力のある山です。この登山月間には、この山域を世界各国の登山家に解放し、登山技術交流の機会を提供したい。

◇**主催**　中国登山協会、青海省登山協会

◇**期間**　一九九二年六月二十日～七月二十日の間、入山は随時。

◇**場所**　青海省内の崑崙山脈の玉珠峰（イージュフン）（可々塞極門峰（ココセイジーモンフン））およびその姉妹峰二十二峰。主峰（玉珠峰）の標高は、六一七八・六㍍で、東経94度16分、北緯35度39分に位置し、青蔵公路のコンロン・パスの東西両側20㎞の範囲内で実施。

◇**申し込み期限**　五月十日

◇**登山コース**　大本営は主峰の北側四ヶ所、東と南側に各一ヶ所設け、主峰へは三ルート、姉妹峰および縦走等のルートは各隊自由に選択できる。他に往復の観光コースも自由。帰路には、西寧市で登頂証明書、記念品等が贈呈される。

◇**費用概算**　コース、人数、期間、活動項目等により異なるので、詳しくは、申し込みの時点で予算書が送付されるが、標準モデル・コースとしての北京―（空路）―西寧―青海湖島―都南―格尓来―崑崙BC―玉珠峰登山―西寧―（空路）―北京（または上海）の十六日間で人数十名以上の場合、一人当りUSドルで一日八〇ドル。これに日本―北京の往復航空運賃および北京―西寧間の航空運賃往復三〇〇ドルならびに登山料一パーティー当り七〇〇ドルを見ればよい。

なお、本会海外連絡委員会でも、この登山月間の後半に参加する計画を立案中であり、『山』四月号で公募の予定である。

（Y・M）

アデレードより

一月八日に夏のアデレードにかえってきて、アンリーパークのデッカイお家をうるについて色々な不動産やに相談した。彼等はなんにもしてくれないのに相談料なぞを請求してきたり、なんのかんのと法律で動いているオーストラリヤで、今カンカンになっておテルさんがフンガイしています。そこで『山』をじっくりよんで気をしづめました。毎々御苦労さま。（中村テル）

（編集部あて）

誤記の訂正

織内信彦

年次晩餐会も華やかに幕があけられ、盛会裡に終了したことは出席者の一人として同慶の感を深くした。該当者がいないということで誰も推薦されない年が過去にないでもなかったが、この晩餐会でもそういうことらしく新しい名誉会員の紹介がなかったのは、物足りないと言えば言えないこともな

かった。しかし永年会員には在籍五十年という素晴らしいキャリアを残しつつある十四名の会員が発表され、当日出席の当該会員を壇上に紹介されたのは、いつものことながら清々しくいいものだと思った。この晩餐会で同時に紹介された新入会員の方々は、あと五十年たたなければ永年会員にはなれない。それを考えると五十年継続在籍の重みというのが生ま易いものではないということがわかる。

ところで、名誉会員と言えば、本会機関誌の『山岳』第八十一年の冒頭に「年次晩餐会あれこれ」と題する百年史資料ノートが掲載されている。筆者は実はかく言う私なのだが、その十四頁、年次晩餐会と名誉会員の関係について若干の説明を述べたところに、私の不注意からとんでもない誤記をしていることが最近になってわかった。

それは、秩父宮雍仁親王が「昭和二十八年に名誉会員になられている…」と書いてあることだ。昭和二十八年は殿下薨去の年で、名誉会員に推薦されたのは、それより三年前の昭和二十五年四月が正しい。記録の読み違いとは言え、早とちりもいいところ、まことに申し訳ないことなので、後日のためこの欄をかりて訂正しておきたい。

記録や歴史的経過などについて関心の深い向きは、是非『山岳』八十一年の十四頁を訂正しておいていただければ幸いである。

次に、ついでながら、同文の九頁一行目の「三一二号の年次晩餐会なる記事も…」とあるのは、一五九号の誤記であるので併せて訂正願えれば、より正確になることを付記しておきたい。

この二点の誤りについては、畏友望月達夫君が私の一文を丹念に読みかえして発見されたもので、誌上をかりて同氏にも謝意を表しておきたい。

ナムチャ登山
山研改築
合同募金に協力を！

〔短歌〕自然と人と

大橋克也

ブナ林を守れと強く云えざりしわが胸の中に会議終らず
捨て人は僅かならめと拾えども三角点に空き缶の増ゆ
野鼠も巣くいたるらし追う蛇の見え隠れして頂稜の堆（ウズ）
落陽に立ち盡したる頂の社（ヤシロ）鎮まり屑も影なす
ブナ林を守れと強く云わぬまま胸奥の討議未（イマ）だ続けり

図書室だより (7)

▼今回より掲載する山岳地図リストはヒマラヤです。今後五回か六回に亘る予定です。ヒンズークシュからナムチャバルワまでのヒマラヤ山脈と、チベット、中央アジアの山も加えて「ヒマラヤ」と便宜上呼んでおきます。この地域は奥深い山の連なり故に測量が困難で、地図が作りにくいということと、お互いが国境となっているという理由から外部の者に滅多なことでは地図という情報源を公開することがないという特徴があります。「ヒマラヤ」を含む国は、中国、旧ソ連、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマーの各国で、今もってこれらの国々では山岳地帯の実測地形図（既に各国とも五万分の一地形図は完成している）を購入することはできません。

戦前インド測量局はヒマラヤのほぼ全域を大まかに測量し終えていました（縮尺二十五万分の一程度）。チベットや中央アジアはもっぱら探検隊のもたらしたデータ、情報から編集図が作られる程度でした（縮尺一〇〇万分の一程度）。登山隊に付随した地図製作専門家が時間をかけて作った素晴らしい地図の例外もありますが、以上の状況から大部分のヒマラヤ地図は、情報源、ベースマップが同源だということは知っておく必要があります。もっとも最近では中国でも特定の氷河地域の実測図が購入できる場合がありますし、B・ウォシュバーンが作成したエヴェレスト地図のように数ヵ国で協力しあって山岳地図を作るというようなことも実現しています。

会報五五六号「書籍・雑誌受入れ報告・六月」の、スペインの山岳情報センター発行『山岳地図目録』に掲載されているヒマラヤ地図は約二五〇枚に及んでいますが、この中には日本人の作成になる「概念図」もかなり含まれています。「岳人」（一九六七年）や「岩と雪」（一九七〇年代）に連載された「概念図」が数少ないヒマラヤ地図としての地位を得ているということです。旧インド測量局の地図を登山ルートの情報源としてとらえた場合は、尾根の繋がり具合や、谷の分かれ方などが大まかすぎてそのままでは使えません。そこで写真や先行登山隊の情報を加えて細部を細かく仕上げたもの（ヒマラヤのような大きな山体なればこそ、それが可能になります）がここでいう「概念図」です。元図の一インチ四マイルマップを戦前に手にした日本人は殆どいなかったと思われます。し

―九頁に続く―

書　籍・雑誌　受入れ報告　1992年1月

著　　者	書　名／雑誌名	版型・ページ	出版元	出版年	寄贈／購入別
Kurt Diemberger	THE ENDLESS KNOT	251×195／308 pp	Mountaineers	1990	購入
Philippe Beaud	THE PERUVIAN ANDES	190×104／288 pp	Cloudcap	1988	購入
Lucian Devies at al.	JOIES DE LA MONTAGNE	280×250／256 pp	Hachette	1965	松田雄一氏寄贈
白籏史朗	写真集 KARAKORAM MOUNTAINS IN PAKISTAN	370×265／191 pp	山と渓谷社	1990	発行者寄贈
ベルク同人編	それぞれの山	四六版／314 pp	西田書店	1991	萩生田浩氏寄贈
イッポリト・デジデリ	チベットの報告 2　東洋文庫 543	173×118／349 pp	平凡社	1991	薬師義美氏寄贈
井出波龍	百渓繚乱　拓技画の世界	295×210／111 pp	山と渓谷社	1992	発行者寄贈
貫田宗男	二人のチョマランマ	四六版／229 pp	山と渓谷社	1992	著者寄贈
後藤典重編	東海自然歩道を歩く	A 5／111 pp	新ハイキング社	1992	発行者寄贈

日本山岳会所蔵山岳地図目録　5　ヒマラヤ（1）

A官製　B個人、団体　a シリーズ　b 単作　c 付録　d 概念図　e その他

分類番号	発　行　者	発行年	地　図　名	縮　尺
B3−6 b	Central Asian Research Centre	1962	Hap of Soviet Central Asia & Kazakhstan NW	1 : 3,750,000
B3−6 b	do.	1962	NE	do.
B3−6 b	do.	1962	SW	do.
B3−6 b	do.	1962	SE	do.
B3−0 b	RGS	1986	The Mountains of Central Asia	1 : 3,000,000
A3−0 b	中国科学院地理研究所	1971	青蔵高原地図	1 : 3,000,000
A3−0 b	Survey of India	1917	Tibet and Adjacent Countries	1 : 2,500,000
A3−0 b	Survey of India	1920	Himalaya Mountains & Sorrounding Regions	1 : 2,500,000
A3−0 b	中国地図出版社	1989	青蔵高原山峰図	1 : 2,500,000
A3−0 b	中国科学院蘭州沙漠研究所	1980	The Map of Taklamakan Desert	1 : 1,500,000
B3−0 b	Nelles	1988	HIMALAYA	1 : 1,500,000
A3−0 a	ONC	1966	G−6　Pamir	1 : 1,000,000
A3−0 a	do.	1966	G−7　Karakoram	do.
A3−0 a	do.	1963	H−9　India, Nepal	do.
A3−0 a	do.	1964	H−10　Bhutan, SE. Tibet	do.
A3−0 a	GSGS	1951	NJ−48 Samarquand (Stalinabad)	1 : 1,000,000
A3−0 a	do.	1955	NI−42 Kabul	do.
A3−0 a	AMS−1301	1959	NK−43 Almaata	do.
A3−0 a	do.	1959	NJ−43 Sufu (Kashgar)	do.
A3−0 a	GSGS India ed.	1945	NI−43 Kashmir	do.
A3−0 a	AMS−1301	1959	NK−44 Akosu	do.
A3−0 a	do.	1962	KJ−44 Hotien	do.
A3−0 a	do.	1962	NI−44 Pangong Tso	do.
A3−0 a	GSGS India ed.	1945	NH−44 Hanasarowar	do.
A3−0 a	do.	1946	NG−44 Allahabad	do.
A3−0 a	AMS−1301	1963	NK−45 Turfan	do.
A3−0 a	do.	1963	NJ−45 Chien−Mo	do.
A3−0 a	do.	1961	NI−45 Chikitei Tso (Central Tibet)	do.
A3−0 a	GSGS	1948	NH−45 Tsampo	do.
A3−0 a	do.	1956	NG−45 Bihar	do.
A3−0 a	AMS−1301	1963	NK−46 Hami	do.
A3−0 a	do.	1963	NJ−46 Tsaidam	do.
A3−0 a	GSGS−AMS	1946	NI−46 Eastern Tibet	do.
A3−0 a	do.	1948	NH−46 Lhasa	do.
A3−0 a	do India ed.	1945	NG−46 Assam	do.
A3−0 a	AMS−1301	1962	NJ−47 Ching Hai	do.
A3−0 a	GSGS	1961	NI−47 Source of Huang Ho	do.
A3−0 a	do.	1962	NH−47 Upper Mekong	do.
A3−0 a	do.	1949	HJ−48 Tien−Shui	do.
A3−0 a	do.	1946	NH−48 Chungking	do.

―7頁より―

かし旧日本陸軍はこれを入手して二十五万分の一に複製し資料として隠し持っていました。ところが戦争が終わってこのマル秘海賊版が市場に出まわる日がきて、ついに山好きの手に入ったということです。一方同じ地図はアメリカ陸軍地図局（AMS）も一九五〇年代に再編集しており、当該各国で中縮尺の実測図が完成に近付いた一九七〇年代中頃から、「最も詳しいヒマラヤ・シリーズ地図」というキャッチフレーズで登山者向けに販売を始めています。

（図書管理委員会）

図書紹介

山の詩集

串田孫一・田中清光編

山はさまざまな姿で我々を迎えてくれる。山と同化したと感じた時、人は〝詩人〟になり、その感動を人に伝えたくなる。ところが、感動がなかなか言葉になってこない。そんなもどかしさを何度か経験する。自分の言葉の乏しさを補うために次の手を考える。詩人の「山の詩」を覚え口ずさむのである。そんな時、山の詩集があれば……、と思う。

本書は四十四人の詩人による八十七編のアンソロジー（詞華集）である。編者が気に入った詩をノートに書き写したものをさらに厳選したものだという。全体は二部構成で、一部は「山に登る」と題し、山に登る行為を表現した三十七編が収められている。二部は「山の風景」で、山を多方面からとらえた作品が占めている。田中冬二の「大門峠の見える村」や白秋の「落葉松」など、中学校の教科書に載ったものもある。珠玉の作品が集められており、あらためて詩人たちの言葉の豊かさと感性の鋭さを感じさせてくれる。

かつての山行を机上でふりかえるのもいい。また、新しい山への意欲をかきたてられるのもいい。この詩集は山を身近にひき寄せ、山への想いを充足させてくれる。山と生活が今ほどかけ離れていなかった頃の香り、―たとえば、麻のザイル、革の登山靴、帆布のキスリング、ウッドシャフトのピッケル等々の香りがほのかに漂ってきて、それらの山道具の手になじむ感触がよみがえってくるような気分に浸ることさえできる。厳しさと優しさがいつも同居していた山と人との関係を思い出させてくれる。

大谷一良氏の版画のカット（二十一点）、カバー絵が素朴な味わいを伝え、三宅修氏のシャープな写真（十六点）が臨場感を高めている。巻末には詩人の略歴と出典、掲載頁が付されており、詩人と作品をさらに深く知るのに都合がいい。詩的感性を、と願う人の期待に応えてくれる一書である。

一九九一年七月二十日　筑摩書房刊
一七九頁　定価一四〇〇円

（宇都木慎一）

ひとり歩きの金剛山

藤田健次郎著

金剛山は大阪府で一番高い山ですが標高は一一二五㍍しかありません。古くは『太平記』の舞台で、楠木正成ゆかりの史跡、寺院が数多くあり、戦前はこうした史実と伝説、信仰の山として全国に知られていました。戦後は児童、生徒の耐寒登山の山として、近年は都市近郊の日帰り登山、森林浴の山歩きとして親しまれています。年間のハイカー・登山者は実に一二〇万人を超え、その数は日本一の登山者の多い山としても有名です。

さて、著者はある朝、突然〝魔女の一撃〟！　ぎっくり腰になったのがきっかけで、金剛山に登るようになり、その数はなんと三五〇回を数えます。この金剛山の山歩きより感じたことを、エッセイという形で本書は記しています。この山を春に秋にのんびりと、ゆっくり歩き、仕事の忙しさを忘れさせてくれる山歩きのなかから、鳥の声、花の香りに誘われて、約八年間にわたり、都市近郊の低山にこだわって自然のなかでの健康回復と対話を試みた本です。また自然の探索ばかりでなく、実に歴史的なこともよく調べてあり、本書を読まれて、金剛登山をするとまた味わいが増すと思います。文中に添えてあるモノクロの写真が実に本とマッチしている。

一九九一年八月　山と渓谷社刊　B6判　二五六頁　定価一五〇〇円

（三戸田一郎）

静岡の百山

静岡百山研究会編

この本は、山名の由来などの紹介を通じて「生活の中にある山」に焦点を当て、現地踏査も並行して、書誌的にまとめた「静岡県内百山」資料辞典と言える。静岡県山岳連盟会長、八木公

信氏が発刊の辞で次のように述べている。山登りも文化の色彩りを加える時代に入ってきた。静岡県山岳連盟刊『静岡県登山・ハイキングコース一四三選』の姉妹篇である。いわば、静岡県の山の案内篇と、研究篇と言うわけである。ガイドブックでは、飽き足りないところを探って見事に補完されている。類書をあまり見ない、貴重な研究書である。

本書の主な内容は、伊豆・箱根の山々から十六座、富士山と周辺の山々から九座、安倍川流域の山々から十八座、大井川流域の山々から十八座、南アルプスの山々から二十一座、遠州の山々から十八座、都合百座である。

山の紹介が了ると、執筆者の座談会がある。百名山ではなく謙虚に考えて百山とした。全く資料のない山は、はずした。山域的にバランスをとりたい。住民に親しまれている山は入れたい。

「動植物で知られた山々」、「神社仏閣のある山々」、「火を噴いた山々」、「地形地質上興味のある山々」といった項目を作って一応の基準にした。不幸にして落選した山。など、苦労話、裏話が披露されている。

本書を繙いて、歴史の山、花の山を訪れるのもよいだろう。例えば、この地域はツツジ科の宝庫。アカヤシオ、シロヤシオ、ミツバツツジ、トウゴクミツバツツジ、ウラシマツツジ、アシタカツツジ、渋川ツツジ、ヒロハドウダン、アズマシャクナゲ、ホソバシャクナゲ。幻の花・京丸牡丹は如何でしょうか。

資料辞典と銘打っていても、結構な息抜きがある。「静岡の百山一口メモ」なる囲みが①から㊿で随所に散りばめてあって、『山』の読者といえども、新知識を吸収することであろう。

「本文引用資料一覧」が、二段組、七頁にわたって掲載されている。

さて、いよいよ巻末に「静岡県山岳番付」が、本物の大相撲番付よろしく相撲字で書かれている。東の横綱は富士山、西の横綱は赤石岳。解説が一家言あって面白い。最後に「物言いある方は、静岡百山研究会・森まで」。

ぜひ、購入の上、一読を奨めたい。

筆者、金子昌彦、小島守、西畑武、森博。森氏は日本山岳会会員。

〔自然保護随想〕

豊かな自然と個性ある人間の共生を目指して

自然を守るということは、山や森や街の木々と自然の景観を守るということであり、それは二酸化炭素の増加による地球の温暖化を防ぐということでもあります。これは、海を守る、古都を守るというその他の自然と景観を守るという環境保護とつながらなければならない。

近年の全国的規模でリゾート法という美名のもとに山を削り道路を付け、海辺を埋めてコンクリートで固め、リゾート地とホテル、ゴルフ場などを造り自然破壊を一層進めています。自然というものは小は虫や苔や石ころから大は樹木や獣に至るまで全てが一つの系として何百年という年月を経て造られた元の調和のとれた生態系を人間が決めた手法をもってこれを変えることは、その系に何処か乱れが生じてその傷が次第次第に広がり破壊へとつながることを知らなくてはならない。

政府、地方自治体のあり方は、今後予想される勤労者の余暇時間の増加によって、これらの利用が急増するだろうという発想のもとに行われております。このことはとりもなおさず、余暇時間の増加への時代の推移において、民間資本の活性化を図り、経済成長に資するという経済中心の発想から出ている。そしてそれには人々の余暇時間の過ごし方のワンパターン化を促がし、疑似自然と過ごすということを一層進めさせるものである。

自然環境を守り、その地球を守るためには、今後、自然を犠牲にする経済発展中心の政府の態度を改めさせ、人々の余暇時間の過し方にも、リゾート、ゴルフの一辺倒でなく、自然観賞、自然に接するスポーツ、芸術、ボランティア活動などで自然保護を育て自然を破壊しないように一人一人が個性ある過ごし方をしていかなければならない。それは自然環境の保護のあり方が一人一人の生活と心の持ち方をより豊かにしてくれることにもつながる。

そのためには日本山岳会だけでなく、他の市民運動と連携しながら、日本山岳会としては、植樹、山と登山を愛する実践と宣伝活動などを受け持って自然保護とはどういうことかを良く理解していただき、広く人々の心と行動を呼び覚まし、この運動の効果を進め、一人一人の生活と心の豊かさの向上に資してゆかなければなりません。

（中谷絹子）

平成三年十月二十五日　B六版　明文出版社発行　三四八頁　口絵カラー二頁　定価一七五〇円

報告

第二十九回木暮理太郎翁碑前懇親会の報告と次回のお知らせ

一九九一年六月十八日、木暮碑前祭を、午後五時より開いた。石垣政雄会員の司会により、記念感話をしていただいた。

故小原勝郎名誉会員の奥様の晴子会員は「主人と一緒に来たかったが残念である。主人の部屋に、木暮先生の六号くらいの油絵が残されているが、その入手のいきさつは不明である。」

故神谷恭名誉会員の長男、量平さんは「父に似て酒が入らないとうまく話せない。木暮先生を子供のときから知っている。先生のことは、何かにまとめて書きたいと思っている。」

ついで、木暮先生に会の顧問をしていただいていた「霧の旅会」の牧野衛会員は「霧の旅は大正八年にでき、昭和十二年には百五十人位会員がいた。私は昭和二十一年に入会した。現在ではたった六名の会員である。もう会としての山行は不可能になった。」

最後は、長岡の金山淳二会員「慶応の山岳部に入ったとき、木暮先生のヒマラヤの話をきいた。こんなお年寄りがよくもまあヒマラヤの隅から隅まで調べあげたものだと驚いた。そのあと山岳会の学生部を担当したときには、木暮先生が会長をしていた。この碑の建設には、慶応山岳部のOBのかかわりが深い。来年の三十回の催しには、元気な姿で皆さんとお会いしたい。」

暗くなり、恒例の懇親会は、有井館別棟の大広間を貸し切りで開会。山菜料理の数々は「金山のシェフ」といわれる堀口丈夫会員を中心に、平井和雄、石垣政雄、今井洋地、岡部みち子、小林基子、前田清子、里見清子、池田陽子の諸兄姉らによりつくりあげられたものである。

今年も沢山の差入れがあった。三井松男前支部長宅からの高価な煮貝、沼津の加田勝利氏から沼津の活きのいい魚の数々。岡谷の笠原医師からは諏訪湖のわかさぎの甘露煮（御三方とも欠席であるにもかかわらず）その他、会員諸兄姉のお名前は挙げないが、うれしいプレゼントの数々であった。

今回も、イワナの骨酒は大好評で、大いにメートルがあがった。二次会は前庭のたき火を囲み、炎のつきるまで歓談の一時を過した。

翌日は、車に分乗。茅ヶ岳山麓で、北ア、南ア、富士山を眺め、観音峠まで車をあげる。ここから東へ、特異な山姿を誇る曲岳（まがりだけ）へ直登一時間。おりてきて、ヒヤムギでささやかな昼食。

再び車を連らね、県立文学館へ。折りから開かれている「旅の文学」の企画展に招待される。福岡哲司学芸員の案内で会場を廻る。大町桂月、田山花袋、志賀重昂、小島烏水、木暮理太郎、深田久弥、平賀文男、田中冬二、尾崎喜八、野尻抱影、新田次郎等々、山にかかわりの深い文人らの数々の展示を堪能し、来年の再会を約して二日間の行事を了えて解散した。

参加者　赤松光、荒木正弘、荒野康子、安念光、飯島真理、池田稔、池田陽子、石垣政雄、乾能尚、井野千枝子、今井喜美子、今井洋地、岩堀瑞子、内山城、遠藤靖彦、岡部みち子、小原晴子、金山淳二、神谷徹、神谷秀子、神谷量平、北村義男、木村俊博、沓間聖、河野幾雄、河野之保、後藤典重、後藤幸子、小林啓助、小林基子、小松崎和子、小松崎幸子、近藤友好、近藤久子、斎藤健治、里見清子、篠原健夫、篠原秋子、嶋崎晃二、砂田定夫、高田眞哉、田村英也、津田友枝、寺島実千代、遠田栄、中村久美子、滑志田隆、林善一、平井和雄、平山寛、福島一郎、堀口丈夫、前田清子、牧野衛、水野公男、望月重昭、山村秀子、山村正光、山本麻子、山本稔、和田裕次、計六十一名。

（山村正光）

本年第三十回は次の要領で行う。

日時　五月十六日(土)～十七日(日)

場所　山梨県北巨摩郡須玉町金山平

宿泊　右同　有井館☎〇五五一－四五－〇四五五

会費　八五〇〇円（宿泊、食事、記念品、山行交通費を含む）

交通　JR中央線韮崎駅下車、増富ラジューム温泉行き終点下車、舗装道路を徒歩九〇分。タクシーの便あり。

行事　十六日　十七時より碑前祭、十八時より懇親会。十七日は車にて水ヶ森林道に入り、水ヶ森（一五五三㍍・二等△、帯那山（一四二三㍍・三等△）に登り、山梨市駅または甲府駅にて解散

申込　〒400甲府市武田三－六－二七山村正光☎〇五五二－五一－三一七五、五月十日、五十名まで

主催　日本山岳会山梨支部

△　△　△

申込先〒420静岡市馬場町・振替口座名古屋五－五－五七八四、☎〇五四－二五二－二五五九（中村太郎）

〔太平山・智異山〕

姉妹山締結報告

秋田支部　佐々木民秀

岳人同志の交流が縁となって、秋田の霊峰太平山（一一七一㍍）と韓国の名峰智異山（一九一五㍍）が、昨年十一月七日と十一日（世界平和記念日）の両日、太平山三吉神社と韓国の慶南大学において、それぞれ国内調印と本調印の式典を行い、姉妹山としての契りを結んだ。

締結の切掛けは、一昨年の八月に実施された秋田経法大学山岳部（顧問・土肥貞之）の智異山と漢拏山の登山計画の際、とくに智異山が地形的に太平山と似ている点を指摘し、その調査を依頼したことに始まる。

同大学山岳部の帰秋後、当支部と同大ＯＢ会の関係者間で協議した結果、地形の類似のみならず、登山コースの位置や地名など類似する点も多々あることに気付き、姉妹山締結について韓国側に打診した結果、合意に至ったものである。

韓国側へは、昭和四十三年以来親交を深めている韓国山岳会理事の曺斗鉉氏を介して、同会慶南支部（支部長・朴英圭）と慶南大学山岳部を紹介して頂き、支部長はじめ旧知の交流もあって異例の早さで姉妹山として締結した次第である。

山を縁とした姉妹都市は珍しくはないが、今回のように「山と山」と言う直接的なケースは全国で初めてであり、組織的にも数少ないと言われている。

今後、組織を問わず広く希望者を募って訪韓し、隣国の山々を楽しみながらさらに友情を深めあい、世界平和の一助に繋っていくことを念じたいものである。

富士山展望の忘年山行 '91

十二月十五日（日）

平成三年を締めくくる忘年山行は富士山の絶好の展望台である杓子山を中心にして行なわれた。大月駅七時四十分に集合した電車組はそれより富士急、ほぼ貸し切り状態のバスを乗り継ぎ、九時頃登山口近くのとある広場でマイカー組と合流した。

天気は絶好の快晴、担当集会委員の挨拶があり、メンバー確認を終える頃遙かに呼ばわる声があって、東海支部より長駆かけつけられた長老会員の登場となり、参加者全員の意気は大いに盛り上がった。

九時十八分、鳥居地峠に向けて行動に移る。取付き付近の錯綜した山道も集会委員の方々の下見のお蔭で難なく通過、鳥居地峠着は九時四十分。

峠からは尾根を辿るようになり、展望も開けて富士山の眺めが素晴らしい。最初のピーク高座山に着いてみれば屯ろする人達があり、これが不動湯泊りの別動隊七名であった。さらに大入權道峠に至れば同じ不動湯組の三名が待ちうけていて、杓子山に着いたときは大団体となっていた。頂上着十二時十分。

杓子山には幾つかの他パーティが屯ろして寛いでいたが、その中に我がパーティの人と旧知の団体があって、交歓の輪はさらに拡がり豊かな一刻に恵まれた。そうこうする中に富士山には笠雲が懸り始め、遠景の霞も少しづつ濃くなってきた。十三時五分鹿留山に向う。

杓子山を発って十分ばかり、先頭付近に騒めきが起った。何と山田会長ご一行どバッタリ出会ったのである。「見事交叉縦走成立ですね」と担当集会委員はご満悦の態である。狭い登山道に縦一列に連なって記念撮影となる。木に登る人も現れる。会長を囲む和やかな交歓は十分程続いた様だ。

鹿留山は本日の最高峰であるが、そろそろ帰りのバスが気になる人もあって、大方はザックを子ノ神にデポして手短に往復する。冬枯で葉は落ちていてもあまり展望の良い場所ではない。

鹿留山から内野方面の下りは多少岩っぽくなるが、案ずる程ではない。むしろ多くの出会いと展望に恵まれ、内容豊富であった山行は他方で集会委員の方々に参加メンバーの掌握を困難にした様である。前から後へ、後から前へと点呼の号令が二回もかかる。現在員三十六名と確認された。そして全員大満足の態で十六時前には内野バス停に集結、富士吉田で解散した後は幾つかの反省会が盛大に持たれたとのことである。

（古市　進）

三水会新年山行

日金山から十国峠

恒例の新年登山は、坂倉・滝沢両世話人、高田リーダーのもと平成四年一月十一日、十二日にエーデルワイス・クラブと合同で、箱根地区にて行った。

湯河原の奥より始まる日金（ひがね）地蔵（十国峠の近く）への登山道は、距離半丁ごとに丁石が建つ丁石道で、信仰登山道としては古くから存在しているようだが、あまり人が通らないせいか、奥床しく苔生した石がごろごろしている。途中、落葉の下より見つけ出した

寒葵の地味な花の姿を眺めたりしながら登ること約二時間、日金山東光寺に到着、初詣のあとその少し先にある十国峠の草原で大休止。

右手に駿河の海、中央に伊豆の山々、左手に相模の海を眺めての昼食となった。下山はスキーの滑降コースの如くに切り開かれた草道を、眼下に見える熱海の街に向けて土沢へまっしぐらに下る。下山道が車道と合流地点で、今晩新年宴会をして宿泊する仙石原の温泉旅館「福島館」のバスに出迎えられて、これにて一路仙石原へ向い、三水会ならぬ賛酔会と暑めの湯に年始の幸を感じた。

翌日は箱根湯元にある天山の湯につかり、昼食会をして、箱根湯本駅で今年の多幸を祈りつつ解散した。

参加者　乾能尚、大野盛彦、岡野修、片岡博、川上進、坂倉登喜子、妹尾幸雄・律子、高田眞哉、滝沢ちよこ、武田幸男、中保、樋口公臣、平沢哲臣、平戸孝夫、横溝修一他一名。

（岡野　修）

会務報告

一月定例理事会議事録

一月十六日（木）十八時三〇分～

場所…本会会議室

出席者…山田会長、藤平、松田両副会長、小倉（茂）、大倉、大森、重広、小倉（厚）、穴田、石橋、藤井、南川、村井、山口、神崎、関口、片岡各理事、鴫原、橋本、西村、斎藤各常任評議員委任…入沢、伊丹両理事、中島、飯野、両監事、湯浅常任評議員

〔報告事項〕

一、ナムチャバルワ（重広）

十二月七日の臨時理事会で本年の再挙が承認された。二月八日の高所登山委員会で報告と検討を行う。会計報告は、読売、NHK、中国とも完了していない。

二、山岳研究所（小倉）

環境庁、文化庁、営林署、保健所等行政への申請を行う。

三、HAT－J（松田）

環境庁等の後援団体に対する公的な報告手続きは終り、現在公式報告書の作成にかかっている。二月二十一日の臨時総会で今後を決める。

四、中高年登山対策全国大会（支部事務局担当者会議と同時開催）の件（藤井）

大会の運営内容について検討中。アンケートを支部と各委員会に出し回答を得て資料を作りたい。結果は報告書に纏める。

五、文部省競技スポーツ課および生涯スポーツ課の連絡会議十二月二十日の件（松田、小倉）

六、秩父宮記念学術賞の件

平成三年度第二十八回は、「京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊一九八九・一九九〇年の業績」が授賞される旨の連絡があった。

七、募金報告（石橋）

一月十六日現在、会員…一〇二五名、三六九八口、一八、五五〇、〇〇〇円

企業…一〇一団体、四一、八九一、九〇〇円

〔審議事項〕

一、海外登山基金（重広）

藤平委員長以下十三名が出席、六件の申請に対し、次の四件に交付したい旨説明あり本件承認した。

(1)日本・中国ナムチャバルワ登山隊　一五〇万円

(2)アンタークティックウォーク隊　一〇〇万円

(3)マッキンレー気象観測機器設置隊　五〇万円

(4)広島山の会スークーニャン峰隊　五〇万円

なお、小規模でも将来性のあるものに協力したいという意見が多かった。申請のあった各隊に対しヒアリングができなかったのが残念であった。次回からは実施したい。

二、マッキンレー気象観測隊について（大森）

科学委員会として協力しているマッキンレー計画を、日本山岳会の行事として承認する。

二月にテストをし、六月に設置隊を派遣するが、資金は科学委員会として募金したい。

〔その他〕

一、「山岳総索引」の本会受けとり分として縁陰書房に半額に当たる六〇万を三年三月に支払ったが、まだ発刊されず、連絡も届いていないので確認の連絡をとることにする。

〔委員会報告〕

フィルム・資料…入り口の看板を遠藤光男委員が修理した。

早川種三氏の遺品が山岳会に寄贈されたので整理する。

海外…青海省登山協会のコンロンキャンプへの参加希望についてのアンケートをとる。シャモニー登山学校へ参加する案も考えている。

学生部…冬山合宿の検討。明大が利尻

ナムチャバルワ峰登山
上高地山岳研究所改築
合同募金に協力しましょう！

次代に残そう美しい山と渓

岳で遭難、行方不明になっている。青年部…第三次隊は隊長予定者の都合で計画の再検討を迫られている。高所登山…二月八日の検討会では、NHKで放映したナムチャバルワのコンピュータグラフィックや模型なども使って説明したい。指導…山スキー講習会を三月十四～十六日　会津駒ヶ岳、四月六～八日　谷川岳、四月十七～十九日　八甲田山で開催の予定。

〔入会承認者〕…鈴木孝雄氏他十四名

ルーム日誌

（1月）

8日　青年部ブータン報告会
9日　学生部
13日　海外登山基金委員会
14日　三水会、スケッチクラブ
16日　理事会
17日　図書委員会、山研委員会
18日　図書管理委員会
20日　総務委員会、青年部
21日　フィルム委員会
22日　集会委員会
23日　女性懇、科学委員会
24日　海外委員会
27日　資料委員会、アルパインスキー
28日　自然保護委員会

1月来室者375名

会員異動

1月

物故

泉隆次郎（三二四三）91・12・29
今井三男（八九六四）91・12・5
宅間　靖（一〇七九四）91・12
熊谷太三郎（五五九一）1・15
冨塚清一（九五二三）1・17
谷口現吉（名誉会員・一六三二八）1・21
小松　寛（四三一一一）1・26

姓名変更

阿部留美子（一〇七〇六）→西勝留美子

山研・ナムチャ合同募金応募状況

（二月七日現在）

（四十口）神崎忠男、（二十五口）雫石鉱吉、（八口）三田さんを偲ぶ会（六口）袴田通孝、前田美千彦、阿部和行、（四口）早川瑠璃子、神原忠夫、杉山イタル、吉川暢一、（三口）重村清、勝田房治、（二口）柳沢勝輔、藤井信、渡辺立男、黒沢通子、古賀正浩、細井淳、前田昌司、芳野菊子、熊崎和宏、田辺信行、有馬純、馬場勇象、日置邦、小林義明、金子丞二、嶋崎晃一、篠崎仁、牧繁録、（一口）坪山淑子、川端浩文　（累計一千五十一名、三千八百三十六・六口、一千九百二十四万百九十九円）

☎ 3234-6659

この電話でもお知らせしています

◉地学講演会のお知らせ

昨年十月に広島三朗さんを講師に招いて「登山者の為の地形と地学」と題して講演をお願い致しましたところ、たいへん好評で、今後も続けて地学のレクチャーをお願いしたいというご要望が相継ぎました。そこで今回は左記により小畴尚（こあぜたかし）さんにお願いして地学講演会を行います。奮ってご聴講下さい。

記

日時　四月二十二日(水)午後六時四十五分～九時
場所　日本山岳会ルーム（受付六時半より）
講師　小畴尚（こあぜたかし）先生
　　明治大学文学部地理学教室教授
　　明治大学山岳部々長　当会々員
資料　同先生の近著『山を読む』（岩波書店）をテキストとして使用します。（当日配布）
会費　一五〇〇円（テキスト代を含む）
懇談　講義終了後質疑応答を含めて先生を囲み懇談したいと思います。

集会委員会

◉親睦登山の予告

浅草岳と山菜共和国訪問

期日　六月六日(土)～七日(日)

新潟と福島の県境に、優美な山容を盛り上げている一等三角点の山、浅草岳（一五八六㍍）は越後の名山として登山者に親しまれていますが、峰続きの鬼ヶ面山東面に展開する、岩壁群の壮観も目を楽しませてくれましょう。

また豊かな自然に囲まれた山菜共和国（入広瀬村）で素朴な人情と山菜料理の味わいを、山日記の一頁に綴っていただければ幸いです。どうぞ今年の山行予定にお加え願います。

計画の詳細は次号の会報『山』で発表致します。

越後支部

（速報）

◉平成四年度自然保護全国集会

自然保護委員会

期日　五月二十三日(土)～二十四日(日)
会場　朝日の森（滋賀県高島郡朽木村）
会費　一万円（一泊三食・懇親会費他）
その他　自然観察、山行も計画します。

詳細は四月の『山』（会報）に掲載します。

◉中垣淑子・山のスケッチ展

テーマ　日本の山、ヒマラヤの山と人

期日　三月十日～二十二日　午前十時三〇分～午后五時（月曜休館）

場所　嫁菜の花美術館
中野区野方一－二五－九
☎〇三－三三八七－七七七七
JR中野駅より徒歩十五分
バス　中野駅北口より三番乗場

訂正　十一月号（五五八）四頁下段写真説明「（右から2人目…）」は「左から2人目…）」十六頁二段目俳句四句目「萌えやすし」は「崩えやすし」のそれぞれ誤りにつき訂正します。

平成四年三月二十日発行
102　東京都千代田区四番町五－四
サンビュウハイツ四番町
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　山田二郎
編集代表　小倉厚
電話東京（3261）四四三三
振替口座　東京三－四八二九番
東京都港区赤坂一－三－六
赤坂グレースビル
印刷所　株式会社　技報堂